

転転転校生

森野樹

Illustration
ふちでびる

もはや一秒たりとも立ち止まらない遅刻寸前になぜ、僕は歩道に座っているのか。

僕の前でしりもちをついて開脚している制服女子がいた。胸の上にはくわえていたらしいトーストが落ちていて、茶色い髪に、濃い緑色のブレザーとスカート、ブラウスは黄緑という、見ない制服だ。

僕を見て、女子は立ちあがる。立ちあがってもミニスカートはかなりギリギリだ。

「ごめんね」

「あ、いや」

「パンツ見たからいいよね」

女子は笑ってトーストをくわえる。「ふあいふあ
ん」

女子はミニスカートをひるがえし、手を振って走っていった。

しかし、僕が見たのは、男性用トランクスだった。

歩きながら、実は最近、女子高生がトランクスをはくことが流行しているようなんです、というレポートのカメラ目線から始まるワイドショーの特集を思い出した。だからついさっきの光景は価値の低いものだったのだと思いかけたが、はたしてトランクスの中はどうなっているのか。おそらく、いや当然、はくべきものをはいているはずなのだが、万が一だ。万が一ノーガードだった場合、話は全然ちがってくる。さっきの光景を脳の短期記憶からサルベージして永久保存する必要があるわけだが、そんなことを考えていたら反応が遅れた。

気づいて横を見たときにはもう、坂を猛スピードで下ってきた自転車は目の前だった。

「とうっ」

自転車を運転していた女子はハンドルを持ったままサドルに立つと自転車からジャンプした。自転車

は横転して衝突をまぬがれたが、女子は僕に一直線だ。

「よけて！」

もっと早く言って。

身動きできない僕を見て彼女は、空中で体をひねる。僕の顔をかすめて背面から歩道に落ちた。

足元がゆれる。

見ると、体をそらした彼女の頭が歩道に突きささり、脚は空へV字開脚だ。※ただし黒スパッツ着用。

「しっばいしっばい」

脚がヴィクトリーのまま、歩道からもごもごと女子の笑い声をした。「ごめんね、平気だった？」

「え、はあ」

「よっと」

歩道に手をつくすと、腕をのばして逆立ち状態になることで頭を引っこ抜いた。「チャリ平気かな」

女子は立ちあがると、自転車を立てせる。よし、

とうなずいた。

「じゃ」

女子は手刀を立てると、砂煙を上げ走り去った。

あれはなんだったんだろう、とぼんやり歩いていたら学校への最後の赤信号にひっかかった。

でも僕はあせらない。携帯電話を開くと、すでにチャイムが鳴っている時間だったからだ。投了。

殺気。

横へ視線を向けると、十メートル向こうに、僕の立つ交差点へと走ってくるセーラー服の女子が見えただけだ。気のせいかな。

信号に視線をもどしかけたが、またセーラー女子を見る。なんか変だ。走っている途中の姿勢で静止している。

ゆらゆら、と彼女のシルエットがゆれ、空気にとけた。

「残像だ」

背後で女子の声がして、首すじに冷たいものがあてられた。「よく気づいたな。おっと、動くとき血を見ることになるぞ」

耳元でささやく。

「あ、え」

「一高転入を辞退しろ。さもなければ」

冷たいものがさつきよりも押しつけられる。

「辞退ってなんですか」

話だけの動きでも、のどが冷たいものに近づき、ひやりとする。「ぼ、僕は一高の生徒なんですが」

「……なんだ」

女子は言うど、冷たいものを僕の首から離れた。持っていたのはガリガリ君ソーダ味だった。

「まぎらわしい」

セーラー服の女子はそう言うと、袋を開けてガリガリ君をガリガリ食べはじめた。「暑い」

信号が青に変わる。どうしよう、逃げても追っこないだろうかと迷っていたら、彼女が動かなくな

った。ゆっくりとゆらぎだして、だんだん色がうすくなり、消えた。

もはや遅刻とかどうでもよくなりつつある僕は、のろのろ通学路を歩いてた。

のろのろしていたらあることに気づいた。やたらに、知らない制服姿に追い抜かれるのだ。僕の通う利根川^{とねがわ}沿い第一高校、通称一高は、男子は黒の学ラン女子は紺のブレザー紺のスカートのはずだが、走っていく生徒たちは、緑やら赤やら青やら灰やら、明らかに一高生じゃない人ばかりだ。

この先でなにかイベントでもあるんだろうか。徐々に、一高が見えてくる。

二分、三分の遅刻はあるが、こんなに豪快な遅刻は初めてだ。教室に入りにくいな。

とか考えていたらいきなり後ろからドンと押されて僕は倒れ、背中を数人にふみふみされた。顔を上げたらもう、ふみふみしたやつらの背中はずいぶん遠い。

「ちくしょう、待て！」

立ちあがったらまたぶつかられて倒れ、背中をふまれ、ガリガリ君の当たり棒がなぜか学ランのえりのあたりから出てきた。やつか、いつの間に？ と当たり棒を見ていたら、頭の真横を革靴が走り抜けていく。やばいやばい。僕は急いで道路をわたった。反対側の歩道を歩きながら、観察する。

たくさん走ってくる見なれない生徒たちは、一高の塀にそって、先を争うように走っていく。正門を指しているのか。

なにが起こっているのだろう、と校庭を見た。なんだあれ。

僕は毎朝、校庭側の南門から入って校庭側の昇降口へ行くわけだが、その南門からぞろぞろと、いろんな制服の男女が出てきているのだ。放課後になった瞬間かというくらい多い。

なんだなんだと校庭側のフェンスから敷地内を見ている。すると正門から校庭へ抜けられる、校舎の

間の道を生徒の波がぞろぞろ歩いてきていた。校庭の中央にある、運動会などに登場する白い屋根つきの受付みたいなやつ数カ所の前で行列ができていて、その数は百人か二百人か、たくさんの人だ。受付？ をすませた人が、南門から出て行っているようだ。なんだかわからないが、一人だけ逆流したら目立つな。

正門から入ろう。遅刻確定だし。五分くらい誤差だし。

南門をあきらめた僕は立ち並ぶ住宅の前を通り、学校の塀から十メートル離れた状態を保ちながら大回りで角を曲がる。

走る生徒たちを横目に角を曲がって正門への直線道路を歩いていったら、公園に人がたくさんいるのが見えてきた。

学校の、ちょうど正門の向かいには広い公園がある。近づいていくから公園の中も見えてくるのだが、ぎっしり人人だ。おなじみ紺のブレザー女子&黒

の学ラン男子の、一高生の集団がいた。体育館ほどの広さはございませんが、こちらゆったりとした敷地の公園となっております。だが、一高の全生徒が入るにはさすがにせまかったようで、入り口近くには生徒があふれている。

あふれた生徒の一人が、僕を見つけ、手を振った。いまどき、三つ編みにひざがかかれるスカート丈の女子が、小走りでやってきた。ひざがチラチラ見える。ひざチラマニアは大興奮だろう。

「ガガガググ」

女子、内田は笑顔で言う。「ゴガゴグ」

「これなに？」
僕は、学校に走っていく知らない生徒たちを見ながらきいた。

2

内田と初めて会ったのは入学してすぐ、同じクラ

スになったからだ。見た目は普通、というかくそまじめな外見だから普通ではないのだが、まだ普通の範囲の中にいた。だが、一度会話をしたら普通なんて思わない。言葉が聞き取りにくく、集中しないと話ができないのだ。だから、内田はクラスメイトに敬遠されていた。

ある日の休み時間、僕は日直だったので黒板の字を消していたら、教卓の近くで、内田の話し方をバカにしている男子たちがいた。彼らのせいで教卓の前は通行止めで、僕は任務を遂行できずにいた。

僕は男子たちに、ちよつと後ろ通して、と話しかけたら、同時に彼らの爆笑が起こってかき消された。男子たちは僕に気づかないまま内田のものまねを始め、やつと僕に気づく。

「ががががが。ぐーぐー」

一人が言うのと、他の男子が笑う。「うける。

な？」

「うけねえよ」

僕の声は意外なほど大きく、教室が静かになった。「あ、ごめん、黒板消すからいい?」

僕はへらへら笑って言った。

男子たちはじろりと僕を見てから教卓から離れていき、僕はクラスメイトの視線を感じながら黒板をきれいにした。席にもどろろとして内田をちらりと見たら、ぺこりとおじぎだ。そんなの求めてない。

僕は別に、正義感の人じゃない。イライラしただけだ。やりたくもない黒板きれいきれいきれいきれいきれいじゃまされてる状態+しよぼいものまね+それで爆笑している彼らという人間+しかし女子が選ぶのは僕ではなく彼らという現状+内面よりも外面、つまりイケメン+、といういろでイライラだったのだ。せっかくそれを自分の中でとどめていたのに、急に質問してくるから、ついイライラが口から出てしまったんじゃないか。どうしてくれる。謝れ。その日から僕は、一般男子フォルダからすぐキレる男子フォルダに移されたようで、クラスに居づら

くなり、内田とは仲良くなった。どうせなら内田よりも……。

いまま公園の外にいる僕と内田だ。

「ゴグギグゴガガギグゲゴグ?」

内田は言う。

「当たり前だろ」

僕は言った。「一日で忘れるわけない」

僕は現在二年生だが来年、つまり三年生の間、一高は一年間増築工事が行われる。全体工事なので、三年になったら僕らは、校庭に建てられるプレハブの仮設校舎で高校生活最後の一年を過ごす。その翌年からは新しく大きくなった校舎で在校生は快適な学校生活を送れるようになるという話だ。ナイス、ノーメリット。

内田は正門を見た。いままたくさんの、知らない生徒たちが正門へと走っていく。

「ゲゴゲ」

内田の説明によると、増築分生徒が不足するので、

一高は転入生を募集するらしいのだが、その受付が今日かららしい。それはいいが、ではなぜこんなに転入希望者が殺到しているのかというと、一高に来れば、学校の授業料が無料になり、綾小路大学へエスカレーターで進学できる権利が与えられる、という誤情報が流れたからだという。根拠は、綾小路家の娘が一高生だから、というだけらしい。無理がある。そもそも、入れば天国っていう大学じゃない。TOEIC900点以上じゃないと二年生になれないとか、卒業偏差値80、とか言われてるんだ。

「ギグガーゲツゴゲ、ガツゲガガガギゴガツゲガガギゴ」

「ネットか」

ネットてまちがった好条件の転入生募集のうわさが広まり、しかも、受付は早ければ早いほど合格しやすいなど、情報はゆがんでいつているらしい。

いま二、三年生の、関係ない学年の生徒までまち

がって殺到しているという話だ。

「ゲグゲガガギゴ、ガギゲグガガギ」

内田は公園の中へ視線をやる。

公園は、遊具がなく、だだっぴろい空間をフェンスで仕切っているだけの広場で、園内のあちらこちらで教師と、それを囲む生徒たち、という図があった。

「事実じゃないって言えばいいのに」

「ゲグゲガガガガガガガ」

「あつてる部分もあるのか」

学内試験で綾小路大学進学、しかも成績優秀者は高校、大学と授業料などの免除や、援助金も支給されるというのは、本当にあるらしい。あるらしいが、ネットの情報では、形式上の試験で、希望者は全員推薦を受けられるというように解釈され、広まっているという。

「ギギゴグガ、ガギゴガギギ」

「一高って、サイトないんだっけ？　そうか。じゃ

あ、どこで否定しているのかもわかんないのか」

僕は腕組みした。「でもそもそもどこから」

「ギガゴ、ガガギゴゴガグガグゲゲグゴ」

「まだ？ これ以上来るのかよ」

本当に日本中から来るのか？

僕がため息をつくとき、内田の視線が僕からずれた。

「ガゲ、ガッゲ！」

内田は正門へ声をかける。

一高のバッグを肩にかけた学ラン男子が、正門へと歩いていくところだった。

内田の言葉を理解できないのか、不思議そうに振り返ったその男子はそのまま正門に近づいていた。

すると、正門に入るか入らないかというタイミングで、男子はいきなりふっとばされた。三メートルくらいの高さがある公園のフェンスを飛び越え、男子は園内に落下した。悲鳴が上がり、救急車、早く、という声が起こる。

「は……？」

なんだこれ。

「ガッギゴ、ガグガググギガッガギゴガギガゴ」

内田によれば、あんなケガをした生徒は何人かいるという。

「どういうことだよ」

「ゴグギゲ」

内田は正門を指す。「ガゲ」

僕は内田の言うとおりに、目をこらして正門をじつと見た。

たくさん生徒たちが走り込んでいく正門に、ふつ、と影が通りぬける。

「いまなんか通った？」

僕が内田を見ると、内田は大きくうなずいた。

「ゴググギーゴゲ、ギゲガギグガギガガグガギッゲギゴガギグゴ」

「はあ？」

見えないくらい速く走っている生徒がいるって、なんだそれ。

「ゴゴググガガ、ゴガガグガッゲグゴ」

「もさ？」

僕が言うとう内田はうなづく。

もさつて猛者？ 見えないようなスピードで動けるって、アメリカでの忍者のイメージ、みたいな。

ありえないだろ。

待てよ、とガリガリ君女子を思い出す。

ううむ。

「まあいいや。とにかく、危険だから誰も学校には入ってないんだな？」

僕はほっとして言った。

「グググ」

内田は首を横に振る。「ガガゴゴググギガガガ」

「え。なんで。どうやって」

ほっとして安定しなかった気持ちだが、大きくゆらいだ。

「ググガ」

内田は言った。

車か。

綾小路さんは、毎朝黒塗りのでっかい車で正門の中まで家の人が送る。たしかに、あの車だったら吹っ飛ばされないだろう。逆にぶつかった方が吹っ飛ばぶ。

「じゃあ、つまり、綾小路さんだけ学校の中に入ること？」

内田はうなずいた。

最悪だ。

昨日、帰りのホームルームで担任が言った。

「綾小路から、みんなに話があるそうだ」

教室の視線が集まる中、綾小路さんは席を立ち、教卓の前に立った。

「みなさんと一緒に勉強してきましたが、このたび私は転校することになりました。明日がこの学校に通う最後の日になります」

教室がざわつく。

ざわつきを制して、担任が口を開いた。

「急な話だが、綾小路は家の都合で海外へ行くことになった。みんなも知っているとおり、綾小路の家は特別な仕事をしているから、急な引越しもあることだ。残念だが、みんなで笑って送り出してやろうと思う」

担任はそれからなにかまだ話をしていたが、僕の頭には全然入ってこなかった。

黒板の前で微笑んでいる綾小路さん。

綾小路さんがいなくなる。

明日が最後なんて、そんなのありがた。心の準備ができてない。

どうしよう。

なにがどうしようなんだ？ 自分でもよくわからない。

「綾小路さんを送る会をやるのはどうですか」

と、女子が言った。

すぐに、賛同する声が起こる。

「放課後になつたらすぐ迎えが」

綾小路さんは申し訳なさそうに言う。放課後になると、黒服の人が昇降口の前に立って待っているのだ。綾小路さんはすみやかに教室を出て車に乗り、学校を出て行く。

「だったら、ちょうど明日の六時限目は俺の授業だ。そこはホームルームにしよう」

担任が言った。

粋いきな計らい！

「じゃあ、どうする？」

とんとんと話は進み、まとまりのないクラスが五分で明日の予定を立てることができた。

僕の学ランのポケットには、プレゼントが入っている。綾小路さんが帰ってから、プレゼントをわたすことに決まったのだ。綾小路さんからのプレゼントはもう決まっている、とそのとき担任が言っていた。学校の増築とか、綾小路大学への好条件入学制

度とかだ。送り出される側がプレゼントかよ、とみんな苦笑して、しみみりしてしまった。

僕のプレゼントは、ボールペンとシャープペンシルのセットだ。あつて困るものじゃないと買ったのだが、考えてみれば綾小路家ならいくらでも常備されているだろう。そう気づいて、昨夜はいつまでもベッドの中でうじうじ考えて眠れなかった。

もつとも、眠れなかつた主な理由はちがう。

僕は、学ランの内ポケットの上をなでた。手紙が入っている。

綾小路さんに対する、僕の気持ちだった。

もちろん、面と向かつて好きだ、と気持ちを伝えるべきだと思う。だが、告白する時間を見つけられないまま転校、となつたら後悔してもしきれない。いざというときのためのアイテムだ。保険があるというだけでも、すこし落ち着けた。

しかし。

「送る会どころじゃないな」

僕は言った。「学校に入れない」

学校は、転校生候補たちによって閉ざされていた。正門を抜けて昇降口に入れさえすれば、綾小路さんの待つ教室まで行けるのに。

「ガゲ」

内田が公園内を指した。

校長がトランジスタメガホンで全校生徒を集めている。

僕と内田も公園内へ移動した。

「では解散します」

校長の号令で、一高生は公園から出て行く。

校長の言っていたことはほとんど予想通りで、人が集まりすぎたため学校業務が停止しているの、今日は休校だという。わざわざ遠くから飛行機でやってきた生徒も多くいるというので、転入希望の生徒対応は続けるということだ。

僕は担任を見つけて話しかけた。

「先生、学校へは入れないんですか」

「あ、ああ」

担任はうなずいた。「こんな状態だからな」

「綾小路さんは校内にいるんですよね」

「ああ」

担任はうなずいた。「プレゼントは、代わりに先生がわたすことになってる」

担任は、容量たっぷりのスポーツバッグを指し、希望者はバッグにプレゼントを入れるよう言った。

「あの、綾小路さんはもう帰っちゃうんですか」

「ああ。もう三十分もすれば迎えの車が来るらしい」

「そうですか。わかりました」

僕は礼を言って、正門前へ歩き出した。

公園からはぞろぞろと一高の生徒たちが流れ出ていく。吹っ飛ばされないよう道を選んでいった。

時間がない。でもどうすればいいんだろう。

転校生候補たちは、相変わず数が減らない。

いや、むしろ増えてきてないか。

「ゲゲゲガギ」

「うわ」

急に内田の声がしたので、僕は大げさに後ずさりしてしまった。

見れば、すぐ横に内田がいた。

「なんだ、まだ帰ってなかったのか」

「ガゲガガギゴ？」

「まだ」

僕は言った。「僕は学校に入りたいたんだ」

「ガゲゲ」

「それは」

僕はまわりを見た。

僕と内田しかいない。

内田なら大丈夫だろう。

「誰にも言わないでほしいんだけど」

「ググ」

内田はうなずく。

「綾小路さんに会いたいんだ」

僕が言うと、内田は目を大きく開いた。

「ゴグギゲ」

「それは」

最終的にはあなたもウチダ語が分かるようになります。